慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	稲荷社祀官大西親盛の和歌 続々：京都学・歴彩館蔵『〔歌日記〕』翻印と解題 (2)
Sub Title	A third study on waka poetry of Onishi Chikamori, a shinto priest of Fushimi Inari Shrine in the middle Edo period : research and reprint of utanikki owned by the Kyoto Institute, Library and Archives
Author	一戸, 渉(Ichinohe, Wataru)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2020
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.55 (2020.) ,p.119- 153
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20200000-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

稲荷社祀官大西親盛の和歌 続々

―京都学・歴彩館蔵『〔歌日記〕』翻印と解題（2）―

一戸　渉

はじめに

本稿は『斯道文庫論集』第五十三輯に掲載した拙稿「稲荷社祀官大西親盛の和歌―東丸神社蔵『松葉集』解題と翻印―」（以下、前々稿）及び第五十四輯に掲載した「稲荷社祀官大西親盛の和歌 続―京都学・歴彩館蔵『〔歌日記〕』翻印と解題（1）―」（以下、前稿）に続くものとして、京都学・歴彩館の所蔵する大西家文書乙に含まれる大西親盛（一七〇三～一七七八）の歌稿を翻印し、解題を付すものである。前稿では該書の前半部分（巻頭から安永二年まで）の翻印を掲載したが、本稿では後半部分（安永三年から安永七年まで）の翻印と解題を掲載する。

なお、該書は原本自体に書名が備わらず、所蔵機関において「〔歌日記〕」との整理書名が付されている。内容は日記というより年ごとの詠歌を書き留めた歌稿というべきものであるが、便宜上、所蔵機関の整理書名に従うことにしたい。

解題

前稿にも記したが、改めて『〔歌日記〕』の書誌を略記する。

長帳綴。一冊。無表紙。外題内題共になし。楮紙。一四・三×三九・六糎。〔明和四～安永七年〕〔大西親盛〕写。無

奥書。整理番号大西家資料乙五二八。

該書は奥書もなく無署名の資料だが、内容及び筆跡から大西親盛の自筆稿本と断じてよい。書物の体裁としてはじつに素っ気ないもので、現状は横長の長帳綴を中央部で二つ折りにしてある。内容も年ごとの詠歌を書き留めた、将来的に家集を編纂するような際に利用するための資料といった趣のもので、必ずしも広く公開を前提としたような仕立てではない。

これも前々稿及び前稿において述べたことであるが、本書の著者である親盛は稲荷社祀官にして非蔵人を兼ね、また荷田春満及び冷泉為久・為村・為泰の指導のもとで和歌の修練を積んでいた。前々稿で紹介した『松葉集』は元文三年（一七三八）から明和二年（一七六五）にかけての詠歌を収め、本稿で取り上げる『〔歌日記〕』は、明和四年（一七六七）九月から安永七年（一七七八）六月にかけての詠歌を収める。明和三年から翌年八月頃まで記録の欠落はあるものの、この二つの歌稿によって、冷泉家入門後の親盛の和歌上の活動のほぼ全貌を窺うことができる。

とはいえ、本書を通読してだれもが気付くだろうことは、詠歌状況のヴァリエーションの乏しさかと思われる。冷泉家からの出題をこなしたものや稲荷社への月次法楽和歌、竈家（東羽倉家）・祓川家・毛利家・松本家など稲荷社社家の間での稽古会や追悼和歌の勧進に応じた作、下鴨社・梅宮社・上御霊社等の社家との贈答歌が大部分を占めている。むしろこうした単調さが、近世期の社家としての和歌活動の通常のありかただというべきなのかもしれない。とはいえ意外な人物との交流や、冷泉家の指導の具体相を知ることができるなど興味深い記事も少なくない。以下、年次を追って、若干の注解を加えてゆく。

【明和六年】

四月頃の条に見える「肥後国祇園社神職行藤志摩守」は六所大明神宮（祇園社はその祭神の一）の社家の出で、寛保二年に石田梅岩と問答を行っている人物（『石田先生語録』）。

明和六年七月二日、荷田春満没後三十三年に際して詠まれた「おぢのみたまによみてまつるうた」を初句の冠に置いた十五首は詞書にあるごとく、「ふるきを思ふ心をよせて供ふ」「秋哥」とのことで先師を追慕した秋の歌が並ぶが、春満の学者としての側面に言及したと見做しうる歌は「蓬生に庭の訓の跡ふりしあきをとひきて鈴虫の鳴」の一首が辛うじて認められるのみであるのは少々意外にも思われる。親盛としては単に型どおりの

追慕の念を詠じたまでなのかも知れないが、その死から三十三年もの時を経て、神主家たる大西家当主としてすでに下社神主の地位にあった親盛にとって、かつての師春満の「庭の訓」が具体的にどのようなものであったのかは、少なくともこれら十五首からはいっさい読み取ることができない。

七月頃の条にある「三峯翠黛」題をはじめとする稲荷山十二景和歌は、詞書にもある通り、荷田信郷の勧進による島田元直画の稲荷山の十二の景観と伊藤東所による漢詩十二首から成る画巻で、明和八年七月には『稲荷山十二景記幷詩画』と題した版本も刊行されている。信郷がこの十二の組題で諸家に詩歌を募っていたことについては以前述べたことがあるが[1]、ここでの親盛歌もそのひとつである。

【明和七年】

「医師間枕亨安九十賀勧進冷泉家出題」とあるのは、頼亨翁の和歌の師として知られ、伴蒿蹊『近世畸人伝』でも取り上げられた馬杉亨安（武者小路実陰の息高松重季門）のこと。彼の九十賀の勧進和歌が冷泉家の出題であったことは従来知られていないことかと思われる。

公遵法親王（隨自意院）の家来という高橋図書なる人物については未詳だが、貼紙に見える「源高保」と同人であろう。この頃の親盛は菊の栽培にずいぶんと傾倒していたようで、前年の明和六年条にも「愛菊友」である伏見奉行組与力の津田為右衛門の追善のために催された伏見の本教寺での菊花供進会において菊の花に付した一首が見える。

この年の十月十三日に挙行された鴨長明五百五拾五年遠祭のために、下鴨社社家の梨木祐為の勧進に応じた和歌があるが、祐為とは同じ為村門であり、また同じ社家という身分もあって親盛とは種々の接点がある。

年末頃の条に見える「尾州横須賀坂丈之進」「正盈」は知多の豪商にして俳人の方間舎楓京のこと。従来知られていないようだが、彼は親盛とも接点があったようで、本書に見える通り、親盛側から送った紅葉文様を刷った料紙に認めた和歌をめぐる贈答のやりとりがあったようである。楓京はこの年の三月から六月にかけて後桃園天皇の即位礼に際しての禁裏警護のために在京しており[2]、恐らくはその時に親盛と交わったのであろう。

【明和九年／安永元年】

この年に親盛は七十歳を迎えたためその関係の詩歌の贈答が多い。正月二十日に王母献寿図に画賛を添えて親盛の七十賀と

して贈った畑柳安は後桜町天皇の侍医である。四月二十八日の「氏蔵人常芳」は院蔵人の細川常芳。五月頃の条に見える「吉見三河」「吉見三河菅原正寛」は北野天満宮社家で非蔵人の吉見正寛（前名正代）のこと（東丸神社蔵『非蔵人家伝』参照）。

十月十三日に親盛が男子誕生の祝いの歌を贈った「菅原永叙」も非蔵人で北野天満宮社家吉見家の一統である（先の正寛とは別家、先掲『非蔵人家伝』参照）。

排列から安永元年十二月頃と思われるが、「或人」が親盛のもとへ持参した「和哥の書二巻」を（恐らく親盛が購入した上で）冷泉家へ差出した折の、澄覚（冷泉為村）との贈答は、書名等は不明ながら、庫外に流出した冷泉家蔵書がこのように門人を通じて返還された事例として注意される。

【安永二年】

排列からこの年の七月頃、筥崎宮大宮司の「吉野常陸介壱岐ノ公光」なる人物が度々懇望のため、「入道殿」すなわち師の為村の添削を経た上で、「壱岐国筥崎宮十二景」を詠じている。親盛の書きぶりからはかなり熱心にこの「壱岐国筥崎宮十二景」の詩歌を乞うていたようであるが、いま他に親盛以外の事例を見出すことができず、いかなる人物かも未詳である。

【安永三年】

排列から五月頃と思われるが、芍薬の花盛りに、親盛がある人から芍薬の和歌を乞われたものの、古歌に例のないものであるため師の為村に事情を話し、加筆して貰った三首がある。詞書にもある通り芍薬は『色葉字類抄』等に「エヒスクスリ」との訓が見えるものの、歌語としては使用例がない。一首目の「ふかみ草」は通常は牡丹のことだが、長嘯子『挙白集』には芍薬を「ふかみ草」と呼んだ例もある（一四七八・一四七九番歌）。ただしここでは眼前の夏の芍薬の姿に春の牡丹の面影を感じるという歌意であるから、外見的な特徴が似た花であるがゆえに歌語として選択されたと解すべきだろう。ともあれこの三首及び詞書からは、先例の乏しい芍薬の歌についても添削に応じる為村の指導の柔軟さと、先述の菊も含めた親盛の草花への偏愛を窺い知ることができる。

さて、その為村がこの年の七月二十九日に六十三歳で亡くなっている。親盛は「右哥者冷泉入道前大納言澄覚為村卿江以詠草相伺作分也」とここまでが為村の指導を経た歌であることを示し、また為村について「高名之歌人惜哉」との感慨を書き記している。その約五ヶ月後、親盛は為村の息である為泰に「寄松

祝」題での詠草を息子の親臣を介して差出し、指導を仰いでいる。為村の死後も引き続き冷泉系の門人として和歌の修練を積んでいったわけである。

この年、稲荷社は神幸祭及び還幸祭での行列供奉を古式に則って再興しており[3]、本年中の記事に関連する詠歌が複数確認できる。この中で注意されるのが「十一月五日」と詞書に注記があるものである。延享三年の綸旨にて勅裁があった行装を橋詰町の寄進で製作したことに関する詞書及び和歌、及び当年三月十七日の神幸祭の行列供奉再興に際して詠じた二首（本年一月条の貼紙に見える「絶たるを…」幷に「いなり山」歌）を寺町通五条橋詰町の「額田正三郎」なる人物の懇望により親盛が染筆したことが詞書からわかる。この額田正三郎は宝暦九年刊『野坡吟艸』の刊記に「皇都五條西橋詰町額田正三郎梓」と住所も符合していることからもわかるように京の書肆で、父親が野坡門の風之であったことから、文下との号で俳諧上の活動も行っている。従来親盛との接点は知られていないが、延享三年の綸旨があった際には父の風之（延享四年没）も存命であったから、親子二代にわたって稲荷社への信仰が篤かったものと見え、そうした縁から橋詰町を代表して親盛へと染筆を依頼したのであろう。

十一月十一日に五女の婚姻を祝す和歌を贈っている「大坂小西法橋有邦」だが、住吉大社御文庫に寛政三年から同十二年にかけて彼が奉納した百首和歌があり、その奥書の署名が「浪花医生　法橋小西有邦」とあることから大阪の医師と見られる[4]。小西有邦は賀茂真淵門の歌僧海量と交流があったことが知られているが[5]、翌安永四年二月八日にこの五女の婿がねと対面した折の一首や、安永七年条の「大坂住人或代官之由七十賀小西有邦勧進」との注記ある「寄松祝」題の一首もあり、親盛とは種々の接点があったようである。

【安永四年】

先述の通り、前年七月に冷泉為村が没して後、同年十二月にはその息為泰に親盛は詠草を提出し、引き続き冷泉家門弟として和歌修練を継続する意志を表明している。しかし本年条を読めば解るように、それからすぐに為泰の添削指導がはじまったわけではないようだ。正月の「霞添春色」題での稲荷社法楽和歌の注記「法楽今年中之哥為泰卿一期終後伺御点写留」、及び八月条の「従是以下冷泉中納言為泰卿御点之哥留之最如御点加点写御添削者傍注下倣之」からは、本年七月二十九日の為村没

後一年祭に和歌五首を霊前に供えた後になってようやく親盛はこの年の自身の詠歌をまとめて為泰に提出し、添削を仰ぐようになったことがわかる。一年の間隔を空けたのはやはり先師為村への儀礼的な配慮であろう。

この年には神幸祭及び還幸祭での行列供奉に際して使用する唐鞍や錦蓋・菅蓋・御翳・御鉾・御盾・御弓・箭御太刀などが寄進された際に詠まれた歌が目立つ。四月に神祇伯資顕王より稲荷社御祭勅裁の綸旨を辛櫃に入れて神幸の行列の前に持たすべき旨が言い渡されていることも含めて、前年の祭礼再興の余波と見てよい。

正月頃及び二月頃の条に登場する「三輪則寿」は安永五年正月条にも登場するが、この安永四年の九月八日のこととして詞書に「伏見役屋敷与力三輪金左衛門則黨三回忌追慕」のため親族の勧進に応じた和歌があり、またそれと対応して安永二年十一月頃の条に「三輪家よりむこかね則黨身まかりし由告来を聞て」との詞書ある一首があること、加えてこの則寿は十一月の条に登場する「伏見なる三輪の老翁」、安永五年四月条の「伏見なる三輪の翁」と同人と目されることから、この三輪則寿も伏見奉行与力であったと考えられる。芍薬の株を何度か贈られており、親盛とは園芸愛好仲間であった模様である。

九月十八日に親実（親盛孫で後に親寓と改名）が松茸の公事（稲荷山で採れた松茸は幕府への献上品となる）のため稲荷山に入ったところ、山中において珍しいことに稲が実っており、これは祥瑞であろうとのことで神前に供えた際の歌があるが、貼紙に万葉書された和歌の結句で「まで」を「左右手」と表記しているのは、『万葉集』二三三一番歌を踏まえたものであろう。荷田派における万葉書については以前論じたことがあるが[6]、荷田春満とその一門が晩年に実施していたのは日本書紀歌謡に基づいた真名表記であり、春満の門弟時代の親盛も同趣の表記を行っていたが、この安永四年時点での親盛は明白に『万葉集』を意識した表記を行っているため、質的にやや異なる部分がある。恐らく春満からの影響というよりも、神に献じた歌であるが故に神秘性・呪術性を帯びた万葉書を採用したのであろう。これは万葉書の使用法としては伝統的かつ定型的なありかたではあるが、とはいえ『万葉集』に準拠した表記を用いている点は、真淵流の万葉調の影響も同時に認めるべきかも知れない。この年の十一月、七十歳以上の長命の官人に寿字を揮毫して献上するよう後桃園天皇より勅命があり、七十三歳の親盛もその

求めに応じた際、稲荷社の祭神に奉った歌もまた万葉書である。これも同様に祭神への献詠ゆえの所為であろう。

【安永五年】

四月頃の条にある、樋口町の人々による唐鞍奉納に関わる歌の詞書に「熱田社の神宝の内に古き唐鞍のかた有しよし聞伝て、此くらのうつしを造り奉る」とあるのは、やはり前々年に再興された神輿渡御の行列を飾るに相応しい、古式に則った品が奉納されたことを特記したものだろうが、この時期の京洛における復古的な機運の高まりを感じさせて興味深い。

十月頃の条、青蓮院流の詩歌巻を孫の親実が持参してきた際に詠じた一首があるが、この詩歌巻は「先父の比ひ」とあるので近世前期頃のものとなろうか。当該書を秘蔵していたという「樫尾先生」は未詳ながら親実の手習いの師であろうか。

【安永六年】

この年の正月三十日、宝暦十一年に没した荷田信舎の没後十七年の霊祭が行われ、親盛は和歌二首を霊前に手向けている。詞書にもある通り、親盛は家重から家治への将軍代替わりに応じた朱印改めのために宝暦十年末に江戸に下向しており、その帰路において信舎の死を知ったらしい。晩年の春満のもとでともに和歌の修練を積んでいた信舎の訃報に接した際のかつての旅中の思いが、老境の親盛の胸に去来したのであろう。長文の詞書も含め、哀切である。

【安永七年】

本書の末尾には、この年の六月三日に松本讃岐守為廉亭にて催された稽古会での探題の歌題「梅遠薫」のみが記されている。親盛が没したのはこの年の七月十一日のことである（東丸神社蔵『非蔵人家伝』）。恐らく病の床に臥し、詠歌を書き留めることが叶わなかったのであろう。

最後に、前々稿において元文三年かと推定していた親盛の冷泉家への入門の時期と経緯について補足しておく。伏見稲荷大社の所蔵する親盛の日記『日次案記』（記録一五‐九）の元文二年（一七三七）閏十一月二十三日条に以下の記述があるという。

一冷泉大納言殿御亭江参入、今朝以親教中川右近有案内申達所午刻計可令参旨也、右近江令対面右近云、兼而中将為村朝臣迄於御所内々被示置候和歌御門弟之事、冷泉御門弟之義ハ御家法相定有之故、一通可被示聞之由ニ而被示云、是迄他家江之門弟之品無之哉否、又云歌道執行只今当分之もてあそひの為メニ候や、いつ迄も可学所存候や否、又云

当家門人之上は詠歌猥ニ世上江るふ之事可相慎候事、右之ヶ条一通得所存、其上表向一通可令沙汰給之由也、且又愚詠有之候ハヽ、書付可令披見旨也、予答云師ハ親類共ニ而先年致死去今ハ無之候、歌道之義は一生之楽と致候事ニ候、愚詠打絶無之候所、此比愚父七十賀組題ニ而社頭祝ニて詠置候可入御覧旨、則詠草相認右近迄令内見之所、右近云一両日中ニ書中ニ而可被示聞給之旨也

右は二〇二〇年八月二十五日に開催された「近世中期復古神道形成過程の史料的研究」科研第一回定例研究会における上島亮平の発表「稲荷社祠官大西親盛の冷泉家入門」の配付資料からの引用である。上島発表を踏まえつつ内容を整理すると、同じ稲荷社社家で非蔵人の安田親教を案内に出させて冷泉家雑掌中川右近と対面したところ（予め内々に冷泉家入門の意思は御所において伝えてある）、冷泉家の門弟は「御家法」の定めがあるため、他家への入門経験の有無、歌道修練を継続する意思を問われ、また入門後は詠歌をみだりに世上に流布させてはならないこと、詠歌があれば提出するよう指示があった。親盛は師である春満は先年死去していること（「親類共」と述べているのは、親盛の実の祖父である祓川幸親が春満の父信詮と実の兄弟であるため）、歌道修練は「一生之楽」として継続する意思があることを述べ、父の七十賀に際して詠んだ「社頭祝」題の和歌を詠草に認めて差出した所、一両日中に返事があるとのことであった。事実、その二日後の閏十一月二十五日には中川右近より入門を認めるべき旨が無事伝えられていることが同日記の記事から判明する。すなわち、親盛の入門が正式に許可されたのは元文二年閏十一月二十五日ということになる。

更に補足を加える。前々稿の解題において言及した下村菊軒なる人物について、親盛との交流に加え、荷田在満及び賀茂真淵との接点があることを指摘したが、東丸神社蔵『大西家日次案記』（文書番号二三四〇・親盛筆）の寛保四年（一七四四）六月十九日条に以下の記述があることを知り得た。(7)

晴、下村菊軒死去、酉下刻斗歟、性質正直而好学、又漢倭之書籍博職之人也近年病身而両足不能屈伸、為松本甲斐守妻親父也、仍甲州方ニ被為同居、尤懇意也、元医業シテ在京都、依病身為隠者住当所常安逸ヲ願テ辟繁花地テ逸居、去十一日息女死去、愁傷之余持病発メ死惜哉、此人年四十九

松本甲斐守は南松本家の為以のこと。羽倉敬尚「稲荷社社家系

図」（『近世学芸論考』所収）によれば為以の父為重の母は「伏見住下村氏女」とのことであるから、松本家とは縁戚関係にあり、病身であったために為以と同居し、親盛とは懇意で元は医師の蔵書家あったらしい。

注

（1）拙著『上田秋成の時代 上方和学研究』（ぺりかん社、二〇一二）第三部第一章「荷田信郷の雅交」参照。

（2）方間舎楓京については冨田康之「方間舎楓京略年譜」（『俳諧史の新しき地平（論集近世文学4）』勉誠出版、一九九二）に詳しい。

（3）『伏見稲荷大社年表』（伏見稲荷大社、一九六二）。

（4）『住吉大社御文庫目録』（大阪書林御文庫講他、二〇〇三）掲載『奉納詠百首和歌』参照。原本未見。

（5）森銑三「海量法師」（『森銑三著作集』第二巻、中央公論社、一九八八、所収）。

（6）拙稿「和歌の万葉書」（『斯道文庫論集』第五十輯、二〇一六）。

（7）上島亮平氏の御示教による。

『〔歌日記〕』翻印

〈凡例〉翻印にあたっては、以下のように処理を加えた。

1、漢字は原則として通行の字体に改めた。

2、変体仮名は現行の仮名に改めた。

3、明らかな誤字、脱字や衍字等は、適宜、右傍に（ママ）などと注記した。

4、通読の便宜を考慮し、和歌を除いて句読点を付した。

5、虫損・破損等で判読の困難な箇所はその文字数分の□で示した。

6、和歌や文章の添削は該当字句の左傍に抹消符として「〻」を用い、訂正字句のある場合は該当字句の右傍に記した。

7、数度にわたり訂正が加えられるなど、通常の翻字のみでは原本の状態について表現が困難な場合、後注にて現状を説明した。

8、和歌の詞書や歌題、肩付や左注の類は原則として二字下げとした。

9、和歌は原本では二行に分ち書きされているが、字配は無視

した。

10、細字注記など原本の表記をなるべく尊重したが、読みやすさを考慮して適宜修正を加えた。

11、各年の冒頭に記される年号についてはその前に空行を入れ、読みやすさを考慮して字下げなしで記した。

12、添削以外の単なる誤字の訂正については訂正後の形で翻字した。

13、符号などを用いて排列移動の指示が付されている和歌については、その指示に従って排列を改めた形で翻字した。ただし移動位置が不明瞭なものについては原本のままとした。

14、その他、校注者による注記は（　）内に記した。

（前稿より続く）

安永三年

元日口号

立春のもゝよろこひやつゝまゝし霞の衣袂ゆたかに

初春鶯をよみ侍る

冬かけて春を告こし鶯もけさはた更に初音とそ聞

稲荷社月次法楽

正月

春山朝　但宗匠家御出題従二月親業組之伺御召之題也

稲荷やまこのめも春の朝またきかすむをみつの峯の長閑さ

二月一日

宗匠家御初会御出題

松知春

年ことに春まちえたる色そへていやさかえ行宿の松か枝

伏見御香宮神官善祐曾祖母九十賀勧進

二月

心静延寿

吹もけにしつけかりけり幾千年老のかさしの梅の春風

廿九日二書付けし哥

老は尚こゝろしつかにくれ竹のふしみに馴て千世かそふらし

右二首共有被点

午年正月廿二日被仰渡

稲荷社祭礼神輿の供奉応仁のころより中絶し侍りけるを此たひ祀官等願のまゝに勅許ありて神祇伯王より御教書出し下し給はりけれは神の広前に告申て祝の心をよみて奉る哥

絶たるをふたゝひおこすしるしふみさそなうれしと神も見るらん

かつ残る神祭の跡とめてむかしにかへすみちそかしこき

（以下貼紙）

稲荷社御祭礼神輿渡御の供奉中絶し侍を、敷地の人々信心のあまりに昔のことくにき〳〵しくなし奉らまほしと願ひたまへる心さし神慮御感応ましまして願のまゝに勅許あり

て神祇伯王よりその御教書出し下され給ひければ神の広前
に告け申て祝の心をよみて奉る哥
絶たるをふたゝひおこすしるし文さそなうれしと神も見るらむ
いなり山神の祭の跡とめてふたゝひおこす道そかしこき
（以上貼紙）
稲荷社月次法楽
梅紅白（二月分）
しろたへの花の色香に咲つきて尚めつらしき梅のくれなゐ
稲荷社月次法楽
庭菫菜（三月）
幾日数つむとも尽し春ふかく庭に咲そふ花のすみれは
初午（二月十一日）
きさらきや世はとしふれとなへてけふいなりの神をいはふ初午
藤森神社造畢遷宮之日奉祝哥（二月廿四日）
春ふかくいとなみ立て藤森光をあふくみつのみあらか（御点）
いや高に宮つくりせり藤森八千代をかけて神はゐませと
稲荷社月次法楽
首夏風（四月分）
今朝は先心をかへてなつころもはなにいとはぬ風の涼しさ
稲荷社神幸の日雨いたふふり出けれは晴をいのりて読侍る哥（三月十七日）
いなり山ふり出し雨も心して神のみいてとけふははれなん
稲荷社御祭日ことし神輿渡御の路頭祀官等か供奉御再興あ（四月八日）
るによせてよみ侍る哥
老は猶昔の道にたちかへるあふそうれしきけふの祭に
稲荷やま八千世をかけてさかゆけとみゆきに仕ふ神のともの男
或やつかれか病をとふらひきて折節芍薬の花さかりにて侍
りけれはよめる哥やあらんととひけれは、古人のよめる哥
をも見されはと申侍れは、本草に芍薬の和名をえひすくす
りと侍れは古哥も有ぬへしとおもふよし聞えけれは、か、
ること其訳も諸々有へけれは例なきことはよみかたき趣を
申答侍りぬ。されと花を見て不図よみ侍る哥を宗匠家に伺
ひ侍れは入道殿御加筆に三首とも聞えしよし。
ふかみ草見しおもかけを夏もまたあかぬ色香に花そ匂へる
みやひたる花の色香を昔たれえひすくすりと名付そめけん
朝にてめてこし花をたか里にえひすくすりの名をやおひけん
郭公の初音を聞て
朝戸出ておもひもあへす時鳥のきはとひこし初音をそ聞
稲荷社月次法楽

夕早苗（五月分）

乙女子か我後れしとゆふかけてみとしろ小田に早苗をそとる

瞿麦の花を読侍る

朝な〳〵見るもめつらしさま〳〵のいろをましへて咲る撫子

萱草の花の咲りけれは或人哥を乞侍れは

めて、見る花に心をなくさめて老のむかしをこひわすれ草

躑躅の花五月に咲るこゝろよめと人のいひ入けれは

岩つゝし春に後れて咲からにはなはさつきの名をやおひけん

百合の花を読侍る哥、但ためともといふ名をかくして

まれにたにとはて（人も問こぬ）淋き老かためともとさゆりの花や咲けん

野夏草を読侍る

いや高くふもとの野へも茂りつゝ竹の葉山につゝく夏草（あひて）

右哥者冷泉入道前大納言澄覚為村卿江以詠草相伺作分也。

為村卿者安永三年七月廿九日夜卒中差発薨去年六十三歳当時高名之歌人惜哉。

入道前大納言のきみ身まからせ給ふを歎まつりてよみ侍る哥

老か身のあすはしらねとけふはまつさきたつ君そかなしかりける

うつゝには尚こそしたへ夢の世の夢とはかなききみの名残を

八月十日於竈家社友稽古会当座通題応求

虫声滋

秋野の千種の露に所えてはるにおとらぬ虫のこゑ〳〵

稲荷社法楽

舩納涼（六月分）

待出る月のかつらのゆふなみにうかへる舟のかけそ涼しき

大井川夏やあらしの山かけに舩さしよする袖の涼しさ

同法楽

都初秋（七月分）

野辺は先花の都の色見えて露置そむる秋の初しほ

照そふるまつ初秋の夕月にむかふ都の初の山端

寺町通五条橋詰町額田正三郎依懇望令染筆哥、此哥ハ去ル（十一月五日）

三月十七日当社御祭神輿供奉再興之節　勅許之時奉詠進哥

二首既ニ記レ上依テ畧レ之ヲ且ツ延享三年三月廿一日　御祭

勅裁ノ綸旨記載之人路頭之行装之料橋詰町寄進ニ付詠進之

哥并詞書染筆ス未レ記置レ之仍チ是に留ム如左

稲荷社の御祭はもとよりおほやけの御祭に侍れは、この神

わさかる〳〵しからさるを、応仁の世のみたれにふるこ

とゝもたえすたれて、大御神の神威まておとろへけれは祀

官等をはしめ敷地の人々まて年ころ歎き侍れと、わたくし

の力にはふたゝひおこすへき事かたし侍れと、やよいの御祭は年々綸旨を下し置れて正官の禰宜神祇伯家にまうてむかひて頂戴せり。かゝれは敷地京極通五条橋詰町なる人々聞伝へて、世にありかたきさまなりと信心のあまりにこは御祭り再興のもとひなりとて、あつき心さしをおこしてわれらか冥加なり。先綸旨頂戴の路頭の行装をおこそかに取つくろひ奉らまほしとて、祓川家につきよりて延享三年三月廿一日に件の行装の路用のためにと、その料を奉納し給へり。此人たちの浅からぬ心さしを感し、此ありさまをうつの御前に告申詞のはしに御祭再興を祈て大御神を祝奉る哥

稲荷やまむかしの道にたちかへり猶もさかゆけ三の神かき

十一月十一日大坂小西法橋有邦方江第五之女峯令嫁日祝哥

難波小西か許に娘嫁侍るとき寄松て祝の心をよみてあたふる哥

契れ尚宿に千年のかけしめてさかえん色をみつの浜松

十二月一日

大仏本町二町目人々心をあはせて石の灯籠をつくりてさゝけ奉る心さしのあつきを感して読侍る

稲荷山尚も願を照せとてひかりをそふるみつのともし火

稲荷社法楽

八月分

鹿声近

神垣に妻やこふらん引しめのなかき夜よしと鳴鹿の声

野を近み聞も哀そ深草やつまこもれりと男しか鳴声

同九月分

紅葉盛

稲荷やまさかりと見えて紅葉のさしも照そふあけの神垣

秋ふかきさかりとや見む大山辺のこすゑをあまたそめしもみちは

同十月分

暁時雨

小夜しぐれにるとしもなく澄月の光にはるゝ有明のそら

吹さそふ風にねさめの袖寒みあかつきふかく時雨ふりきて

同十一月分

夜網代

寒からん身は宇治川のあしろもる袖はよふかく霜をかさねて

霜の夜も哀世わたるうち人よこほりのとこに網代をそもる

同十二月分

雪中望

稲荷山かつふりつもる雪にけさこすゑあまねくゆふかけてけり

吹さそふ嵐も今朝はうつもれてゆきにしつけくむかふ山端

午十二月

冷泉入道殿薨去後御息中納言為泰卿江始而指出詠草之留

寄松祝

あふかはや砌の松のとしことに尚も栄るやとの言の葉

御点
老も尚幾としかへん砌なる松のときはのかけに契りて
唐衣きつゝなれ見ん此宿の松のときほの色をかさねて

右三首之内第二之哥給御点尤以親臣差出処御対面有之御言尺之有御挨拶之旨申伝

午歳暮

稲荷山すきゆく年をしるへにてわか老楽や尋きぬらん

午除夜

別れてふ年の一夜を惜む哉あくれは更に立かへれとも

安永四年

未歳旦

稲荷山春立けふのしるしにはかすみてみつの峯の長閑さ

稲荷社法楽 法楽今年中之哥為奉卿一期終後伺御点写留

正月分霞添春色

うつし絵もえやは及はん春かすみ色とりそふる山のすかたは
色そふるみやこのにしは時しるやこのめも春と雪もかすみて

正月二日夕祀官等会二集シテ於社務家ニ而祝シテ二新年ヲ設ク酒宴一有リ儀式一詠ル其意ヲ而已

古乃由布辺曾泥乎都良年天美也比等乃須妓婆登理々々以波不波都波留

正月五日三峯御影まうてを催し侍りて

幾千世も春くりかへし引しめのみかけをあふけ神の宮人

三輪則寿閑居に春を迎といふ心を松によせてよめる哥を見て老人を賀して

老か住しつけき宿に松も又ともにそ契る千世の初春

相楽郡賀茂里松吉某か家に第五娘嫁し侍るとき寄松て祝の心をよみて娘にあたふ

宿からそ松を例に相生のちきりつきせぬ万代の春

久我上の里安田家源元寅ぬし

一条の御殿に日々仕ふまつり侍るにはあらて、わかゝりける時よりことし八十あまりみとせふるまて折ふしのつとめ、とし久しく仕ふまつり給へはおのつから聞しめしあけて、この春そのよはひをことふき給ひ御ましちかく仕ふまつれる人々になそらへて、更に身のしなをあらためさせ給ふ。かたしけなきかしこまりの悦を松によせて祝のこゝろをよみて贈り侍る。

あひにあふ君のめくみに老松はおいせぬ千世のみとりをそゝふ

親元宿祢常に住給へる久我上の里の家居、折々洪水のなや

みありけるをとしころうれひ侍りてことし春の末つかたより夏にいたり家ところを四五尺はかり高く築上家をもあらたに造りかへらる。そのいとなみ日あらすなり侍る悦ひを庭なる池によせて祝の心をよみて贈り侍る。

なみならぬ家つくりせり池水に万代すめるかけをうかへて

右之哥は安永三年の夏の内へ入へし

安永四年二月八日難波なる小西のむこかねに始てまみえ侍る時、梅花によせてよみ侍る

時しるくなにはに咲やこの花にはる幾千世も契りてそ見ん

二月中□ころさえかへりて雪のふり積たる梅か枝に鶯のき鳴を聞て

雪つもりそれとも見えぬ梅か枝に香をしるへにときなく鶯

ふりつもり花もわかしと梅かえに雪をわひつゝうくひすのなく

三輪則寿の野辺にまかりて梅花をよめる哥を見て、春風に吹さそはるゝ匂をは袖にとゝめよ野辺の春かせとよめる哥を見て

見し人の詞の花の梅かゝをさそふもあかぬ野への春風

（以下貼紙）

行て見し人の詞の梅か香をこゝにうつして匂ふ春風

（以上貼紙）

親教宿祢常に久我下里に住給へる家ところ桂川のなかれ洪水のいてくる折々、淀川の水さかのほりてあふれ入ぬるなやみをさけんと家地を高くつき上、家をもいや広くいや高に造りあらため給ふ。そのいとなみ日あらすこともなくもなくすみやかになり侍る悦を申述んと祝のことはを書付て贈り侍る哥一首

動きなく万代やへん里しめていはふ岩根につくる家居は

此哥は先年明和中に普請成就の節読侍り遣はしけるを近頃又々依懇望更認て送り侍る。よてこゝに留置也。

稲荷社法楽

柳原随風

春風の吹も音せぬ青柳はなひく姿もいとゝしつけし

露なからふきもみたさて青柳のいとも長閑になひく春風

稲荷社法楽

山花如錦

けふも又花の錦の木の本をたゝまく惜き山路くらしつ

山姫の春の手向の錦かとかみもめつらん花の盛よ

山姫の織や錦とみねにをにいろをかさねて花そ咲ける

（以下貼紙）
立ならふ松も桜の咲うつむやまは錦につゝむとや見ん
（以上貼紙）
唐鞍三月廿三日
稲荷社の敷地五条わたり醍醐町万寿寺町此両町のひと〳〵
まこゝろのあまりに大御神の祭のおほんために神馬御鞍を
も作そなへ奉らまほし、よきみくらのかたもあらなん、と
あなたこなたにあゆみをはこひ探り求て、しかるへき唐鞍
のふるきかたをとり出ていみしき鞍作りをえらみ、からく
らふたそなへ作りかさりて御社に納め奉り侍る。そのみや
ひやかなるさまは世にめつらしく、玉をつらねこかねしろ
かねをちりはめ、綾錦をもてうるはしく錺れるみくらなり。
しかあれは此人々のあつきこゝろさしをほめて、大御神の
うつの御前に告申す詞のはしに読て奉る祝歌
幾久にいはひそなふる神のこまたまもゆらゝにみくらかさりて
右町内へ書付遣也依懇望
去年分 錦蓋菅蓋芝翁
稲荷社の御祭は元よりおほやけの御祭にて、応仁の世の乱
れよりまつりのいやなともたえ、自から大御神のみいきほ
ひもおとろへ給ふを敷地の人々年ころ歎き侍れと、せんす
へし□□いはんすへしらす。只にとし月をへぬ。世かはり
時うつりて絶たるを補ひすたれたるをおこし給ふ御世にあ
ひて、此たひ願のまゝにゆるし給ふをひと〳〵かしこまり
の悦のあまりに此神幸のおほんために天のみかけ日のみか
けと神のみ馬をおほひ奉る錦蓋菅蓋御翳なと更にまうけ
とゝのへそなへ奉れり。此人々のあつき心さしをほめて、
大御神の広前に告申す詞のすゑに読て奉る哥
春幾世うけ引給へけふそなふみゆきの御笠つなのまに〳〵
稲荷社敷地の人々大御神の御祭のいやわたらせ給ふ道のみ
よそほひなとむかしはおこそかにに き〳〵敷ありけるよ
し、今は年久しく絶て侍るとて年ころ歎き侍るに、此たひ
願のまゝにふたゝひおこし給はりて、にき敷むかしに立か
へりぬとて人々よろこひて、まこゝろのあまりに神幸のそ
なへのおほんためにと御鉾御楯御弓箭御太刀此等の神宝を
更にまうけそなへ奉れり。此人々のねもころなるありさま
を大御神のひろ前に告申す詞のすゑによみて奉る祝哥
万代となかくさゝくるかんたからたえぬ神幸の道のそなへに
安永四年四月伯家江神主代正祝被召出、自今以後神輿渡之
節行列之前江勅裁之綸旨辛櫃可持旨殿下御命之由被仰渡為
御請権禰宜伺候

稲荷社御祭勅裁の綸旨をことしより年ことに神輿のわたらせ給ふ道のつらその御さきに持せてわたし奉るへきよし、神祇伯によりみこのりを告て伝へ給はるをかしこみうけ給はりて、神の広前に告申てよみ侍る。

祭てふけふのみことのふみしるくみゆきかしこみ世にあふくらし

四月廿四日古竈御殿預信名宿禰依二十五回信郷宿禰追慕勧進組題の内

夏日

植残す世のめくみとてあつき日もこかけ涼しく猶したふらし

信名宿禰二十五回詠懐旧之意供進之歌二首

吾こふるむかしをなれもしのひ音に鳴や卯月の山ほとゝきす

めくりきて尚社しのへ夏衣袖のなみたもふり残る身は

稲荷社法楽

雨中早苗（四月分）

よき雨と待えて田子はぬれてしもいとはす植し露の若なへ

雨まちし山田の田子はぬれつゝもあるをたのみにさなへをそとる（御点）

信邦のもとより芍薬のはなを送り恵まるゝを謝して

浅からぬひとのめくみのふかみ草春見し花にまさる色香は

為房のもとより杜若のはなを送り給るに謝して

夏かけて見るそ涼しきかきつはた紫ふかきはなのめくみに

稲荷社月（ママ）法楽

鵜川篝火（五月分）

鵜飼舩山かけさらぬかゝり火はまた夕月のかけいとふらん

さす程もなみ路あけ行うかひ舟残るも惜しき篝火のかけ（御点）

松尾日向相春一周忌追孝相長勧進六月十二日

更衣

かへてしも尚露けしな夏衣はるのしたみの花そのの袖

前中神主正四位下和泉守秦高任宿禰六月十四日卒去（実八六月八日二卒去也）

前中神主高任宿禰はわかゝりける時より友かきのへたてなく相したしみてむつまし。御社においてはかんつかさのふた年のつかさにもすゝみ給ふ次第（ツイテ）に侍りて我身にさきたちてはやく神さり給へは、その名残いひのへん言の葉もなく、惜みかなしみて彼家に喪をとふらはんためによみ侍る。

定めなき道とはいへとさきたゝぬくゐの身にこそかなしかりけれ

前考正三位豊弥高尊霊二十五回追孝供進歌三首

夏月

めくりきて夜よしとしたふ六月のあかつきふかき影そ露けき

夏草

植のこすその世のまゝにしけらせてけふそ手向る花のなつ草

夏雨

五十ふるなかはふりきて夏衣したふたもとそ雨にしほるゝ

相楽郡賀茂里なるむこかね松吉のなにかしわか稲荷山にまうてきけれは始てま見え侍るこゝろの悦をいひのへんとつたなき言の葉をよみて書付侍る哥一首

涼しさは千世もへぬへし夏衣こゝろにまつの風かほりきて

ふみ月一日に但馬守為房草花種々提て恵み給るに謝て

あさからぬ恵みの露も色そへてまつめつらしき秋の初はな

稲荷社法楽

樹陰夏月

かけしめてまつもかひある夏山のこの間さはらぬ月の涼しさ

夏ふかき若葉をわけてもる月に木の下露も光をそゝふ

下野守藤原信允はやつかれといとことちにて、いとけなき時よりはらからの兄弟のことくむつましくましらひて世にまれのよはひまてことなくもなくたかひにことふき侍りぬ。時に信允六月十九日卒去けるを聞て惜むにも歎にもたえかたく読侍る哥

おくるゝもつゐにゆくてふ道なからさき立人そ哀かなしき

稲荷社月次法楽

朝見草花

朝な〳〵見そなはすらん神垣に花の色そふ露の玉萩

朝日さす草の笆に色見えて露も匂へる秋の初花

安永四年七月廿九日

冷泉入道澄覚古前大納言の卿一めくりにめり給ふ供進のお

ほんために哥五首の題を探り求め出て神わさのさはりなき

ひま志多婦宇堂といふ五言の仮字を冠に置わかちてよみ侍る哥五首幷草花を手折そへて大御霊の御前にそなへ奉る。

草花　此哥は入道殿花五十首の御詠巻頭哥に、立春の日数かそへていつよりもおそしといそく庭の初花とよませ給ふ哥の心によれり。

したふそよ春いつよりもをそしとていそきし庭の花にその世を

夏夕

たゝならぬおもひをそへて時鳥なくや五月の夕やみの声

秋月

ふして歎き起出てむかふ秋のよの月にそしのふこそのおもかけ

冬暁

うかりける夢にもひたす袖さえてなみたそこほる冬のあかつき

述懐

手向んと折袖ぬらす露はかり花もいろなき秋のことくさ

未八月

従是以下冷泉中納言為泰卿御点之哥留之最如御点加点写御

添削者傍注下倣之

稲荷社月次法楽

八月分御題
嶺月照松

霧はれて嶺の松原吹風の音もさやかにすめる月かけ

照そふる月のやとりに草つゆのひかりをちらす峯のまつかせ

於松本但馬守亭社友会兼題

八月十五日
草花露　応乞

照そふる月の光に秋の野は露もにほへる花の百くさ

照月の夕かけふかく置そへてあきの花野に匂ふしら露

同
三日月　応乞

あふかはや秋の光と三日月のまつ照そむる西の山端

また暮ぬ空とやは見んみか月のゆふかけ照す西の山端

あふかはや西こそ秋とみか月の□照そふる山の端の影

同
八月十五夜月　即興

雲霧もはれて名高き秋こよひ月の光そ四方にみちぬる

天津かせ雲吹はれて秋の月千夜に一夜の影そ照そふ

同
瀧紅葉　松本家会当座組題之内到来応求

たきつ波なかれも染し色見えて河辺残らすもみちしにけり

此句古はよみたれと今はよまぬ事と也

かけうつす瀧のしら糸いろはへて浪もあやなす岸のもみちは

稲荷社月次法楽

九月分
露光宿菊

夕月よふりせぬ花の色はへて光をそふる菊のしら露

暮ふかく置はなにそとゆふつゝのひかりをそへしきくのしら露

於大西相模守亭稽古会

九月七日
聞鹿声

野をちかみ聞に哀もふか草や妻こもれりと男鹿鳴こゑ

山かつらくるれは聞にたえせしな哀妻こふ小男鹿のこゑ

同
岸款冬　当社探題

芳野川暮行春をせきとめて岸根に咲る山吹の花

行水に色をうかへてよせかへるなみさへ匂ふ岸の山ふき

紫の名さへゆかしといはぬ色にさける藤江の岸の山吹

九月八日伏見役屋敷与力三輪金左衛門則薫三回忌追慕親属

勧進予断志之通題和哥十首之内

秋懐旧

ふり残る身は鈴虫に声そへて三とせの秋のよゝしとそなく

めくりきて尚こそしのへはかなくも過し三とせの秋のむかしを
はかなくそ見し世の秋をしたふかな袖のなみたも三とせかさねて

九月十三夜月 即興

千五百秋こよひあふかんとよあまりみよの光の長月のかけ

秋津洲の秋幾めくりあふき見んこよひ照そふ長月のかけ

九月十八日にちか実松茸内見とて山にまうてけるに、水晶山といふほとりにて稲の生たるをえて取りかへりみせ侍りぬ。誠にいなり山と称しはへれと、いまた稲の生たるといふことを聞されは、めつらしきことにてよきみつに侍りなん。まつ大御神にそなへ奉れと申ていはひの心をよみ侍る哥

とりいはふ秋の初穂のいなり山尚もさかゆけ神のまに〳〵

秋幾世尚もさかゆけいなり山八百稲千束つみそなふまて

（以下貼紙）

安永四年九月十八日依松茸之公事親実與社友登当山而到字謂水晶山於其辺有稲生為珍奇執二三穂帰予見之不播種而山中生稲者珍物也称当山謂稲荷山者秦伊侶具公用餅為的化為白鳥飛翔居山峰稲生遂為杜名見古記其後未曾聞謂稲生也蓋神霊之令然祥瑞也宜備進其穂而祝祭者也因以作祝歌云爾

秋幾世猶毛栄行伊奈利山八百稲千束積備婦左右手

（以上貼紙）

稲荷社月次法楽

十月分 行路時雨

ふり出て岡の中道あしとくそしらぬやかたもしくれにそとふ

追かせに 立よらん野辺の通路しくれきてしはし晴間を松のしたかけ

十月廿七日 社友稽古会兼題於毛利豊後守亭会

十月 山時雨

夕日かけさしも晴行峯の雲いまそしくるゝ西の山端

稲荷山秋もすきてし下紅葉猶そめんとや間なくしくるゝ

同 名所松 採題当座

神こそはしろしめすらめとし波や幾世津守の浦の松原

甲斐あれと尚社祈老の浪かけて久しきわかの松原

稲荷社月次法楽

十一月分 霜夜月冴

神垣にふけ行月の影さえて榊葉しろく霜そ置そふ

更行は雪と見るまて置霜にひかりをそへて月そさえぬる

小忌衣斎場の月の影ふけて霜をかさぬる袖の寒けさ

社友稽古会月次兼題於松尾安芸亭

夕千鳥（十一月分）

浦千鳥いつこも同し夕浪にまた立かへり昏ふかく鳴
鳴かはす友もなきさや夕しほのさしも千鳥の声そともしき
数あまたあさる千鳥の大井河夕なみよする瀬々の汀に

伏見なる三輪の老翁のもとより芍薬の根こし紅白二株送り給はりけれは移し植侍りてこれを謝る文の奥によみてつかはし侍る哥

あすしらぬ身をもわすれて花見んときみか恵みに春をこそまて

安永四年十一月恭ク有テ二大命一而択二諸官七旬以上ノ之耆老一令レ書寿字ヲ二矣僕亦辱ヤツカレモ遇ク二此時一ニ謹テ而染ム二禿毫ヲ一因テ為奉レ告　太御神ニ一作テ二祝歌二首ヲ一敬テ白ス

世耳稀乃齢乎撰エラヒ備ミトフ御コト寿キ美カシコク古等畏久染之一筆

年高久御世栄行登以奈利山布天執祝婦杉乎例尓

右者安永四年中冬初五広橋従一位藤原卿兼胤卿召親臣仰云汝父使親盛書寿字而可献之由賜料紙小色紙十枚即日帰亭伝之云云畏奉染腐毫以同月十日附親臣奉卿之許季冬十三日彼卿召親臣為御祝物賜方金諸官之筆者一統預此賞祝万歳奉頂戴者也

稲荷社月次法楽

雪朝（十二月分）眺望

此朝け遠の高根もふり積る雪に間近くむかふさやけさ
今朝むかふ雪の山々大ひえの高ねはけにもふしの面かけ

月次稽古会兼題　未閏十二月十四日於寵家会

連日雪

日をふれは庭も笆もへたてなくやまと見るまて積るしら雪
人とはぬ思ひをそへて日かすふる雪に恨そ尚もつもれる

雪中早梅（後十二月稲荷社法楽）

いとはやも咲（花）にけるかもしら雪のふるとしかけて匂ふ梅か香
匂はすはそれともしらし白雪の梢にまたき花の梅かゝ
冬こもりおもひもあへすふる雪のふる枝にはやも匂ふ梅かゝ

年内梅（後十二月兼題）　社中稽古会

めつらしな冬くはゝりて一とせにふたゝひ咲る梅の色香は
雪もまたふるとしなから立春をまつしりそめて梅や咲らん

十一月於松尾安芸亭稽古会探題

暮秋

深草や鳴虫の音もかれ〳〵にあはれをそへて秋そ暮行
野へ山辺秋の名残になかめわひぬそめし草木もおもかはりして

詠歳暮（未後十一月）

暮て行冬の日数はくはゝれと惜むこゝろはゆたけくもなし

老ぬれは冬くはゝれる年たにも間なく覚えてはやもくれ行

安永五年
歳旦（申）

敷嶋の道をしるへに立春のことはの花や世に匂ふらん
立春のけさの光を敷嶋や神のいやしり世はいはふらん

稲荷社月次法楽冷泉中納言為泰卿御出題
春神祇（正月分）

春立は尚いや高くいなり山かすみて見つの峯の御社
稲荷やましるしの杉の春幾世栄る色やみつの神垣
春立はゆふしてなひき吹風も空も長閑にあけの神垣

三輪則寿の本より庭前の小竹に鶯の鳴を聞てよめる哥幷春雨の哥をよめるはし文の序に書付て見せ給ふ返事に

算へとれ庭の園ふの呉竹に千世をさえつる鶯のこゑ
置と見てきみひろひけん春雨に梅の香なから落るしら露

秦直親宿祢身まかりけるよし告来るを聞て

ふり残る身には直しも淡雪の哀きえゆく人もかなしき

二月一日
宗匠家会始

松遐年友

此宿に松も幾千世色そへてともに栄ふる春の言の葉
宿からや松も一しほ言の葉のいろに色そふ千世の初春

稲荷社月次法楽
折花（二月分）

山桜さそふ嵐におくれしと神の手向に先手折こし
神籬に見つゝもあかて八重桜手折てかさす花のしらゆふ
雨風にうつろふもをし桜花ぬるともしゐていさ手折まし

同月次法楽
暮春（三月分）

花鳥のあかぬ名残をけふは猶はるの別におもひそへぬる
花はねに鳥はふるすにかへるてふみちをしるへに春やいぬめり

未年十二月於竈家稽古会
旅泊夢（探題）

磯枕うきねは夢を見る程もなみの音にそ驚かされぬ
夢にさへ見し夜うれしき波枕ちさとへたてし故郷の空

四月廿六日冷泉家祖為頼卿百五十回為御灵祭供進御出題門

弟中勧進
夏懐旧

ふり残るむかしをしたふ玉かしは庭も葉広く世々にさかえて
遠き世をしのひ音に鳴ほとゝきすうの花咲る軒とひ来て
祭るてふ宿のその世をしのひ音にうしやう月のやまほとゝきす
伏見なる三輪の翁の本より去年の秋の末つかた残雪といふ
芍薬の株を恵み給るをすなはちうつし植置けれは、ことし
三月の末つかたより卯月の間に花の咲けるを見て、翁の本
へよみてつかはし侍る。
尚残る雪と見るまて咲匂ふはなの色香に恵みをそおもふ
安永四年三月御祭神幸のおほんために神馬の御鞍二具、五
条わたり醍醐町万寿寺町の人々唐くら作りて納め奉りたり
けれは、又今年五条わたり樋口町の人々より今一そなへ御
くら奉らんと熱田社の神宝の内に古き唐鞍のかた有しよし
聞伝て、此くらのうつしを造り奉るといみしきくらたくみ
人えらみて作り、松本家によりて納め奉りけれは、その心
さしを大御神に告申詞の端に読侍る哥
受引ん神のまに〳〵心さしあつたの馬くらうつしそなふる
五月十二日於下野守亭社友稽古会
早苗
いなり山ふもとの小田の若なへのかねて秋まつ色そ涼しき
朝な〳〵みとりをそへてすゝしさは露の玉ぬく小田の若なへ
稲荷社月次法楽
郭公（四月分）
五月まつこゝろや同しほとゝきす花立花の軒端にそ鳴
軒ちかく己か五月をまつかえにまたしのひ音の山時鳥
稲荷社月次法楽
夏月（五月分）
夏の夜は霧も霞もなか空にさはらぬ月の涼（ママ）そ涼しき
程もなく見るかうちより更行と涼しさそふる夏夜の月
五月十二日於下総守亭稽古会探題
夕顔
むすひ置（うゆる）露の光もほの見えて月も涼しき夕かほの花
人はいさあれし垣根とのみ見ましゆふかほ咲る花のかこひを（此初句置かたし）
稲荷社月次法楽
納涼（六月分）
稲荷やまなつとしもなき涼しさは風もときはの杉の下かけ
すゝしさは稲荷山のかけふかく杉の村々かよふゆふ風
夕月夜こゝろつくしのかけならて木の間もりこし風の涼しさ
初秋（七月分）

夏のきのふいなりの山のすきの戸にけさ吹入るゝ秋の初風
今朝はまた草木の色もかはらねと置そふ露や秋の初しほ

五月於松本讃岐守亭稽古会探題

志賀山越

誰もみな心をそめてしかのやま花の下(五)みちこゆる色香よ
春ふかくしかの山道立かへりあかすこそ見め花の藤波(志賀山越は桜也)

六月十日松尾日向相春第三回其男松尾安芸追慕勧進

夏懐旧

おもひやり吾たにぬらす夏ころも三年かさねてしたふ袂を
夏ころも跡とふ袖やしほるらん露もふか草三とせふりきて

入道古前大納言入道澄覚為村卿第三回御斎息中納言為泰卿(来ル七月廿九日)

追慕出題

寄露懐旧

露ふかくしたふ袂そしほれぬる三年ふりこし秋を○むかへて
跡したふ袖のなみたは秋の野の露よりけにもふりそまされる

石峯禅寺隠居法蔵庵時学和尚の本へ暑気の安否を問ふとて(六月十三日)

庭の草花一筒贈り遣す書の奥に

夏ふかき中に秋まつはつ花ときみに見せまく手折てそやる(草庭)
羽倉石見守より暑気の安否を尋ぬるよし外郎粽二把送り給

りけれはそのむくひに庭前の草花一筒贈文の奥に
夏ふかき草の笆の花なからよく見ん人のために折つる(社)

六月十四日藤嶋遠江より亡父下野守一周忌之御灵祭之給として蒟蒻十五盃贈給其便に付て外郎二棹送遣短尺相添

古前下野守藤原信允尊霊(ソンレイ)一周忌にめくり給ふ霊祭行はるゝよし聞て

夏ころもさそなしほれんめくりきてつゆのふかくさ跡をとふ身は
保田古前内匠頭忠辰朝臣十年あまり七年にめくり給ひて尊霊をまつりたまふよしを聞てよみて奉り侍る
思ひ出て袖をそぬらす夕立のあめも涙もふりしむかしを

六月廿二日於権目代荷田信賢亭稽古会兼題

雨後夏月

雨のゝちあつさわすれぬ浮雲も月の光にきえて涼しき
夕立の雨吹はれて(なごりの意也)照月のひかりをさそふ風の涼しさ

同上

余寒

朝戸出の衣手さえていちしろくしもをかさぬる庭の春風
此朝け打出し波の音さえてこほりにかへる谷の春風

今年七月二日別家氏人羽倉紀伊守信里当第七回仍息上野介(八)

信美為追慕勧進応求

秋懐旧　阿字置冠初秋意

秋来ぬと月にその世をおもひ出てしたふ涙に影そ露けき

冷泉家祖後来迎院為慶卿当二百五十年霊祭為供進為泰卿御出題

穐懐旧

五百年の半めくりて久堅のそらに昔の秋をしそおもふ

めくりきて雲ゐはる〳〵遠き世の秋をそしのふふみ月のかけ

遠き世のたま〳〵けふにめくりあへと手向色なき秋の言の葉

稲荷社月次法楽

草花　八月分

結ひ置契るや幾世秋の野のつゆに紐とく花のもゝ草

あかて尚秋の千種の花ことにうつす心やあたに見ゆらん

七月十九日稽古会於松本但馬守亭催

行路萩　兼題

はるけさの道もおもはし真萩原遠里小野の花をわけきて

分入は錦も中や絶なんとよきて社見れ萩の下道

八月八日古前修理権大夫藤原則信朝臣五十年霊祭嫡孫則有

朝臣追行依有之供進

五十とせにふりこし秋の露ふかくむかしをしたふ袖そしほるゝ

同月廿二日古前三河守則明朝臣十七年依灵祭供進

したふそよ袖の涙に十とせあまり七たひ秋の露をかさねて

八月十五夜月　若衆中依乞作寄

秋の月今宵みちぬる影に社そらも心も澄わたりけれ

影みちて月の名におふ秋の空あふく心も澄わたるまて

いちしるく唐までもあふき見る月のこよひの秋つ州の空

七月十九日稽古会探題於但馬守亭会

遅日

治れる世の春しるくにくる日のくれゆたかなる影の長閑さ

花鳥のあかぬ色香に春の日の遅き暮たに尚惜まるゝ

於毛利豊後守亭稽古会兼題

月秋友

秋幾世なれこし人をかそふれと月より外に友やなからん

老残る身は今更に秋夜のつきより外に見ん友そなき

柞　同右　探題

はゝそ原秋の恵の色わきてまつこすゑより霞も満けん　（うすきも）無珍也

泉川いつしか水もそめぬらんはゝその森のもみちしけれは

瀧昇月　八月十五夜会探題

雲霧をはらふ嵐に影はれてやゝ澄のほる山端の月

山端にたゆたふ月のいつしかになか空高く影そすみ行

稲荷社月次法楽

九月分
秋田

明わたる田面押なへほのみえてつゆの奥手も色つきにけり

宿近み秋の田面をもるしつのあはれよふかく音も聞えて

九月十三夜於松本土左守亭会得探題

海月

難波かた浪路照そふ長月の光を花とちらす浦風

和田の原なかめも空もはる〳〵と波路くまなき長月のかけ

於竈亭月次稽古会兼題

九月廿二日
秋朝霧

在明の月の光に峯晴て山本ふかく下る朝霧

朝戸出のなかめにあかぬ山端をきりかあやにく立そへたつる

同日当座題応求
旧恋

二葉より契りそめつゝ松かえのかはらぬ色に年そへにける

おもひ川あふ瀬もしらす身はふりて幾とし波か袖にかさぬる

稲荷社月次法楽

十月分
千鳥

あくる夜も近き河原の友千鳥ねさめの窓に聞もたのしな

小夜千鳥いつこ行らん照月のあまの戸わたる声もさやかに

月次稽古会親臣催兼題

十月分十二月十日興行
水上落葉

尚秋の色の名残も大井川ゐせきにかゝるせゝの紅葉

しら糸の瀧も深しとおもふまてもみちはなかる谷の河水

落葉有色　声と思ひ候

今しはしはらはても見ん庭の面に霜を色とるけさの紅葉

さそひきて秋の名残と紅葉の錦をたゝむ庭の山風

昔青蓮院に入せ住給ふみこの宮、御ふみての道をあやにかしこくえさせ給ふ。そのおほんなかれ世々たえすして今にいたるまて世の人々おほむなかれをくみてたふとみ学へり。先父の比ひ、このおほんなかれをいとよく学ひえたるいみしき人々つとひあひて或はかる哥あるはやまと哥なとましへて一巻にかきつらねしを樫尾先生秘蔵しもたるをちか実にゆるして見せ給ふよし。たつさひ来てやつかれに見よといひ入けるを見てよみ侍る哥

いちしるく猶も栄えん世に広くなかれたえせぬ水くきの跡

やんことなきおほんかたより六十の賀おほんいはひとてもゝとせいふみきを給はれるよし、信郷宿祢の元よりとりわけて恵み給はりけれは、かしこけれと盃をとりてことふ

き奉りて

祝へとてこふき給ふ此みきは名さへも、とせ汲も尽せし

稲荷社月次法楽

網代（十一月分）

あしろもる袖はさなからこほるらし浪のよるへに霜をかさねて

宇治川や誰うきわさを伝へきてしもの夜ふかく網代もるらん

おもひやる袖さへ寒みうちかはや霜ふかき夜にあしろもる身□

十月稽古会親臣催当座探題（十一月十日興行）

元日宴

今日はまつ雲井にあくる盃やひかりそふらん千世の初春

春たては百のつかさやむれゐつゝ雲ゐの庭にいはふさかつき

古詠草冷泉中納言為泰卿殿へ差出候処、詠草の御加筆に此題宴字を除、元日として詠出しかるへしと被仰給候也

上御霊社別当元善朝臣七十の賀し侍るためとて非蔵人春原元福より勧進して詩にもあれ和哥にもあれねもころなる人々にこひもとめ侍りけれは、やつかれも元よりねもころに侍れはいなみかたくて神木（サカキ）によせていはひのこゝろをよみて送り侍る哥

神垣に猶も栄えんさかきはの八千代を契れ老の行すゑ

八千代へん老かかさしの榊（さん）葉のさかえん色は神やしるらん

稲荷社月次法楽

山雪（十二月分）

吹はらふ雲もあらしの山晴てくまなくむかふ峯のしら雪

大ひえや小ひえもけさはしろたへに都のふしとむかふ初雪

月次稽古会於松尾安芸亭被催十一月廿八日興行

寒庭霜（十一月分）

松栢のみとりもしろく先見えてあけほのさむき庭の朝霜

朝戸出てむかふも寒し白妙に置霜ふかき山かけの庭

朝霜もまた消あへす夕日かけよそに暮行庭の寒けさ

同日探題当座

炭竈

霜雪をしつか願ひにやくすみのけふりの色はけふも寒けし

冬去（ふかく）はその名も高し炭竈のけふり絶せぬ大原（小野）の山かけ

月次稽古会於松本和泉守亭十二月七日催

松久緑

年の内に立春しるく色そへていく世栄えん松の言の葉

年内にみとりをそへて立春を松にそいはふ千世の言のは

立春（同日探題）

あかくらの空に先立春しるく鳥の八声も更に長閑し

申十二月廿六日

年内立春

雪もまたふるとしなから今朝はまつ立春しるく霞そめけり

いとはやも立春しるく冬なからなひく柳のかけも長閑に

安永六年丁酉

元日試筆

立かへる神代の春のためしとてすめるは空にかすみそめけん

正月五日三つの峯御影をいはひまつらんと催し侍りてやつかれはえまうて侍らされは哥（祝の心）をよみてちかおみにつけてさゝけ奉る

下社神主秦親盛上

かしこみもみつの御前に引しめの春くりかへしなかくつかへん

曙聞春鶯（ママ）て

軒端なる竹にやとりてあくる夜のそらにほのめく鶯の声

稲荷社月次法楽

春風解氷（正月　冷泉家御出題）

稲荷山氷もとけて瀧つなみはる立風の音の長閑さ

いなり山春風わたる跡見えてとほり暮ゆく池のさゝ波

宗匠家御初会

春祝言（二月二日）

砌なる松にことふく言の葉のさかふる宿の春や幾千世

宿からそ吹も長閑けし梅柳このめも春の千世の初かせ

古目代信舎宿祢十七廻灵祭依旧友之好供進哥（正月三十日）

いんさき東にまうてゝかへるさのほと大津のやとりにて信舎宿祢身まかり給ふよしを人つてに聞え侍りけれは、およつれかもたはことをかも夢かもうつゝかもとおもへと、ことまことにし侍れは驚てをしみかなしみ侍りつゝ年月をふるまゝに、ことし十とせあまり七とせにめくりきて老のこゝち一入に光陰箭のことくに覚え、友かきのむかしをおもひ出れは夢に夢見し心地して、なきかけをしたひてつたなき言の葉をつゝり、哥二首を作りて御灵前に手向奉る。

旅枕さめてかなしき夢の世のゆめのむかしの春をしそおもふ

又梅の花によせて

植残す花に昔をしたひきてとりたも音なく宿の梅かえ

社友月次稽（ママ）会（上七字貼紙、貼紙下「稲荷社月次法楽」）

於竈家催

霞中梅心（二月）

君か代の春の恵みの色見えてけに咲匂ふ宿の梅か枝
枝かはす松に契りて春幾世梅もときはの色に咲らし

翫花（同日）　探題

春ふかく花の色香にそめし身はかさらすとても老やかくれん

稲荷社月次法楽

霞中梅（二月分）

野を広みありとや匂ふ梅花たちえはいつこかすみへたてゝ
深草やかすみふきとく山風をまちえて匂ふ野辺の梅かゝ

一条右府殿ニ年久しく奉仕人八十の賀し侍る時人々祝の哥

よみて送り侍る予もすめ侍りけれは

春幾世長くつかへて栄らんとのゝ砌の松をためしに

稲荷社月法（マヽ）楽

春田（三月分）

稲荷山瀧つなかれを春の田に神や恵みの水まかすらん
河水も春の田祭る五十串とやなみのしらゆふかけそふるらし
秋をおもふ心をたねとしつの男か春の田面やすきかへすらん

稲荷社月次法楽

卯花盛（四月分）

神祭る時まちえてやいなり山しらゆふかけて咲るうの花
雪ならはなへてこと木もうつまゝしさかりそしるき山の卯の花
いなり山さかりもしるく神垣に春をへたてゝ咲るうの花

稲荷社月次法楽

郭公数声（五月分）

稲荷山五月きぬれは時鳥こゑも惜ます夕かけて鳴
明はまた語りあはせん時鳥夜かれぬ声を人も聞やと
時鳥いなりの山のすきかてに尚ゆふかけて落（をち）かへりなく

社中稽古会親臣催但月次三月分兼題今日興行（五月十六日）

静見花（月次三月分）

長閑にもあかなくそ見る山桜あらしもきかぬ花の木陰（は）に
色香には世のうきことも忘られてたれもしつけく花を社（ゝ）みめ
けふも猶しつ心もてめて見はやちるへくもなき花のさかりは

夏月　同当座探題

五月雨の空も心も打はれて待出し月そいとゝ涼しき
まち出て見る程もなきかけなから袖にすゝしき夏の夜の月

六月十六日於毛利家稽古会公林宿祢催兼題

毎夜待時鳥（四月分）

つれなさをわれはまけしと時鳥猶幾夜かも待やあかさん

夕な〳〵月にしのへはほとゝきすまつ夜積て有明のそら（しのひ音を）

夕立　同日探題当座

なる神の音羽の山の音たかく関路すき行風の夕立

夕立の晴行露の玉かしは残る日かけそさしも涼しき

安永六年酉六月廿五日

家祖母吉田比売真良院尊霊五十年霊祭供進歌五首

寄盧橘懐旧

おやのおやの忘れ形見の袖の香とむかしをしのふ軒の立花

寄郭公懐旧

なれもまた五十ちふる世や思ひ出てむかしかたるや山ほとゝきす

寄夏草懐旧

ふりし世をしのふ袖にもをとらしと露にしほるや軒の夏草（庭）

寄夏月懐旧

面影をしたふ涙の露間にむかへはあくる夏の夜の月

寄夕立懐旧

浪ならていそちふりこし夕立にむかしをしたふ袖そぬれそふ

一覧候

右哥五首当日供進再拝拍手退依病気不勝令親臣読上者也。

尤兼而親臣有社友勧進也。其歌別記有之。

（親盛花押）

酉六月廿五日

冷泉家先祖為相卿四百五十回供進為泰卿御出題

秋懐旧

いや遠く空にそあふく初秋の居待の月のけふのむかしを

めくりきておもふも遠き古をみる文月のかけにしのはん

遠き世の秋の昔をしのはましみる文月の影をしるへに

稲荷社月次奉納

六月分

瞿麦

色も香もさかり久しく咲つきてけに名にしおふとこなつの花（いか）

神もさそ盛ひさしくみつ垣や手向ちりなきやまとなてしこ（に）

同上奉納

七月分

初秋朝露

此朝け草木も更に色しるく露置そふる秋の初しほ

草も木も秋きにけりと朝な〳〵光もしるく露そ置そふ（さやかに）

五月分

夜水鶏　月次稽古会兼題

さらてたにまとろむ程もなつの夜をよひとくゐなは何なたゝきそ

小夜ふかくさえて月見る真木の戸をしらすくゐなやたゝく成らん（のなに）

稲荷社奉楽

八月分

月下鳳

羽風にや雲霧はれて照月に声もさやかににたる初雁
にあまり候故乞加筆候

霧ふかく夜わたる雁の空晴てかすみゆるまて月のさやけさ
二三のつゝきよからす

稲荷社月次法楽

紅葉（九月分）

いなり山みつの神垣照そひて千入にそめし峯の紅葉
稲荷山杉のみとりも色はへて一しほそめし峯の紅葉

社友稽古会兼題

六月分於大西下総守亭但八月十五夜会

夕立廻山

見るか内にこなたすゝしく峯はれて外山にうつる夕立の雲
涼しさは風にいなり（此句いか、）の山晴てよそにすきゆく夕立の空

八月十五夜（即事）

秋津洲にこよひ名高く照月のもろこしまてもすみわたるらん
いなり山願もみつの峯はれてこよひ名高く月そ照そふ

月前虫（探題当座）

草ふかく住虫らにも照月にうかれいてたるこゑのさやけさ
深草や声もさやかに照まさるつきに鳴なる野辺の虫のね

来亥年三月二日実父惣官正四位下豊明霊就五十回尤依神事
月操上当八月廿四日於久我安田家霊祭令修行供進之哥組題
十首（題者 親臣　読上 親実）

朝霞　親教

五十年のむかしをしのふ朝戸出にむかへはかすむ遠の山の端

山花　公林

ありし世をめてし外山の桜花今をむかしの香に匂ふらん

盧橘　親業

立花の花もむかしを忍ふとやあとゝふ宿に咲匂ふらん

萩露　親元

五十年のけふの手向と秋萩を折袂さへ露にしほれぬ

夜鹿　仲

しらぬその昔をしのふ夜もすから哀をそふるさ男鹿の声

時雨　公府

五十年のその世を空に忍ふれは袖もそくれの雨にぬれそふ

忍恋　信郷

つゝむともつゐにはもれん思ふことしのふにあまる袖の涙は

恨恋　親臣

此まゝに朽なんはうし年月をわれからそふる恨なからも

懐旧　親実

なかれきてつたふまに〳〵五十年の昔をしのふ水茎の跡

述懐　　親盛

ふり残るそては涙のひまそなきしたふ五十年の春をかさねて

追加一首　　親臣

しらてしもよそならぬ身の手向くさ露に露そふけふの言の葉

同五首懐旧　　親盛

寄野霞

おもひ出て跡とはなんと春の野のかすみわけこし袖もしほれぬ

寄里梅

植置し梅や幾春ふる里にむかしをしたふ香に匂ふらん

寄池柳

庭の面にむかししのへは浪かけて木かけ露けき池の青柳

寄春月

五十めくり昔の春や二月のそらにそしたふ夕月の影

寄帰鳫　以上五首宗匠家一覧給

はかなくそ霞にきえて行雁に昔の春のわかれをそおもふ

右愚詠の意は、此稲荷山の宿を立いて鳥羽野を分て久我の里に着折ふし梅花咲たるを見、安田大和守か亭にまかりてせんさいを詠池辺に立てむかしをとひ、その夕つかた月にむかひ鳫のかへるに寄、よみ見侍りぬ

右十六首於安田大和守亭霊所予玉串供進次件哥十六首親実読上奉供進次親族中拝各拍手退

八月廿七日

於毛利豊後守亭月次稽古会

七月分被補　元祓川順番也依所労断也

立秋朝

今朝はまつ軒端にそよくさゝ竹の音もさやかに秋や立らん

秋きぬとけさは軒端に音高くきのふにかはる風のはけしさ

稽古会於権目代信賢亭催之

八月分

明月如昼

あきらけき月に照そふ秋の野の花の錦は夜としも見す

露なくは夜とも見まし日につける秋の光の月のやとりに

右同断

残鳫　採題

雪霜のふる里寒くおくれきてみやこの空に哀かりかね

なか里のたか名残にやおくれ来て霜のかり田に今そ鳴なる

稲荷社月次法楽

十月分

枯野朝風

かれ残る野辺はなか〳〵小笹のみ置霜さえてさやく朝風

深草や霜の枯葉を吹からに音も身にしむ野への朝風

九月分
終夜聞虫　月次稽古会兼題

暮て行秋やうらみてよもすからあはれもふかく虫や鳴らん
鳴虫を友ときかすは長夜をわかみのことや恨みあかさん

同上
氷室　探題

夏ころも氷室の山にきてみれはさゆるはかりの木々の下風
ひむろもる山の流は結はねと袂すゝしくかよふ谷風

稲荷社月次奉楽

十二月分
網代

あしろもる袖寒からし置霜の哀よふき宇治（カ脱カ）の川瀬に
網代もり霜の夜ふかくたきそへてとほりにうつるせゝの篝火

同断奉楽

十二月分
歳暮

春をまつ心はさのみかはらねとおいをかさねて年そ暮行
幾そとせ身はいたつらにくれは鳥あやなく積る老か名残は

（以下抹消）

稲荷社月次奉楽

三月分
杜花

立よりてぬるとも染んから衣花の雫の森の下つゆ
桜花暮なはなけのかけたにもさやかにそ見る月よみの杜

毛利豊後守亭

三月分兼題
池辺藤

池の面に松も千年のかけ見えてさかり久しきかゝる藤波
池にひつ松も一入色そひて春あさからぬ岸のふちなみ

（抹消此迄）

安永七年

稲荷社月次奉楽

正月分

冷泉中納言為泰卿御出題

霞春衣

朝な〳〵四方の山端春きぬとかすみの衣たちかさねぬる
春きぬと海山かけておほふ哉かすみのころも袂ゆたかに
稲荷山霞の衣春たてはしるしの杉もみとりをそゝふ

宗匠家御初会

二月一日御出題

鶯為春友

春幾世友とし宿に馴きかんもゝよろこひの鶯の声

末遠き千年の友と此宿のたか木にうつる春の鶯

稲荷社月次奉楽

二月分
柳風

花にたゝ吹社いとへ青柳のなひく□あかぬ庭の春風

神垣にたれ手向てかしら露の玉もゝゆらの風の青柳

於親臣亭稽古会

初会二月廿二日

氷始解

山河や岩間の氷とけそめてはる立浪の音も長閑けし

長閑けしな春たつ風も音しるくとけ行谷川の水

二月廿八日毛利家公府銀婚姻を賀して読侍る

神垣の春や幾千世もろ共に猶もさか行森のさかき葉

西年之分
山家落葉　採題

いつも吹音よりもけにはけしさは木葉をさそふ軒の山風

柴の戸のしは〳〵風のさそひきてこのはにうつむ軒のほそ道

去年分
寒夜埋火　採題

さよ衣寒さ忘れておもふとちとひきてかたる埋火の本

さむけしなふけ行まゝに霜雪の色をかさぬるねやの埋火

稲荷社月次奉楽

三月分
杜花

立よりてぬるとも染んから衣花の雫のもりの下露

さくら花暮なはなけのかけたにもさやかにそ見る月よみのもり

於毛利豊後守亭会

三月廿二日
池辺藤

池の面に松も千年のかけ見えてさかり久しくかゝるふち波

池にひつ松も一入色そひて春あさからぬ峯のふちなみ

同断
翫花　採題

かさゝても花のさかりの春にあひてむかふ色香に老やかくれん

色香にそいなりの山のすきかてに猶ゆふかけて花をこそ見れ

稲荷社月次奉楽

四月分
簾葵

露なからかくる葵の玉すたれみとり涼しく神もめつらん

御世祈るこすのあふひのもろかつらなかきためしは神やしるらん

月次稽古会於祓川佐渡守亭催

四月分
卯花似雪

誰もまた雪と見つゝやうの花をまなひの窓にうつし植けん

消残る雪とみ山の陰にさくうの花かさね袖さゆるまて

稲荷社月次奉楽
郭公（五月分）

住はこそいなりの山の時鳥すきのあみ戸のあけ暮にきけ
いなりやま手向とならは時鳥杉の木の間にゆふかけてなけ

月次稽古会於親業亭催五月廿九日
山家五月雨（五月分）

五月雨に雲とちはてし柴戸はあけぬくれぬの空もわかれし
雲たてる谷の戸ほそは五月雨のしはし晴間も光だに見す

郭公頻（同日）　探題

一声に何あかしけんほとゝきすよゝひとたへすきくに思へは
所からいなりの山のほとゝきすゆふかけて□す夕かけてなく

五月廿二日祓川古佐渡守親富第三回忌親益勧進
夏懐旧

したふその三年ふりこし五月雨の空になみたの袖はぬれそふ

大坂住人或代官之由七十賀小西有邦勧進
寄松祝

末なかき友とし契れ大伴のみつの浜なる千世の松か枝

稲荷社月次奉楽
池蛍（六月分）

浅からぬおもひや消し池水のなみもてそゝく岸の蛍は
神代さそかく社□見れ池水にあまたほたるのかゝやくかけは

稽古会於松本讃岐守亭催六月三日
松下納涼（六月分）

夏ころも身にしむはかり涼しさはあきも覚ゆる松の下かせ
松かけのなかれにむすふ涼しさはなつもよそなる谷の下水

梅遠薫（同日）　探題

（以下白紙）

【附記】本研究はJSPS科研費19K00351の助成を受けたものである。